Ｋ君その２

私の中学時代の同級生であるＫ君は、３年間ずっと成績がトップでした。友達として付き合うようになりました。あるとき、Ｋ君の家に初めて遊びに行くことになりました。私は、興味津々（きょうみしんしん）でした。きっとＫ君の部屋の本棚（ほんだな）には、参考書（さんこうしょ）や問題集（もんだいしゅう）がずらりと並んでいるにちがいない。そんなことを思ったのです。

Ｋ君の家は、けっこうな坂道を上（のぼ）っていかないとたどり着かない場所にありました。自転車で向かいましたが、途中（とちゅう）からペダルをこぐのが容易（よういい）ではなくなりました。「Ｋ君は、毎日、こんな坂道を自転車で通っていたのか」「これは根性（こんじょう）がつくはずだ」などと思ったものです。

ようやくＫ君の家に着きました。Ｋ君の部屋に入りました。物が少なく整然（せいぜん）としていました。本棚を見つけました。すると、私は愕然（がくぜん）とさせられました。何もないのです。私の予想（よそう）は見事（みごと）にはずれました。学校の教科書とみんなが使っているワークブック、そして買うように言われた国語辞典（こくごじてん）と英和辞典（えいわじてん）、それだけでした。すべて見慣れたものばかりです。

私はショックでした。参考書も問題集も１冊もないのです。学校から与えられた必要最小限のものしかないのです。にもかかわらず、Ｋ君は、いつも１番なのです。「これはいったいどういうことだ」私の頭の中は混乱（こんらん）しました。私もそうでしたが、Ｋ君は学習塾（じゅく）にも行ってはいません。

一方、私の部屋の本棚には、ずらりと参考書が並んでいました。私の性格（せいかく）上、国語だけとかではなく、全５教科並べたくなるのです。参考書を買って少し使ってみます。「これはだめだな」などと大して使ってもいないのに、新しいものを買いたくなるのです。その結果、私の本棚には、参考書が５教科×２でずらりと１０冊並ぶわけです。Ｋ君の本棚とは対照的（たいしょうてき）でした。

私は落ち込みました。特別なことなど、何一つやらずともトップの成績がとれることがわかったのです。それに比べて、いったい自分は何をしているのだろうか。無駄（むだ）なことばかりしていたと反省させられました。

Ｋ君の授業に対する集中力（しゅうちゅうりょく）はすごかったと思いますが、私も集中力ならば負けてはいなかったと思います。何せ家で勉強したくなかったので、授業で、学校ですべてを片付けたかったのです。だから、授業中は先生の話をよく聞いていました。話を聞く集中力はあったと思います。

Ｋ君にとって、学校の授業が、学校の先生方がすべてでした。そのことがわかり、ショックから立ち直れないまま、自転車のペダルをこぐこともなく、坂道を車に負けないくらいの猛（もう）スピードで下（くだ）っていく私でした。